

# 荀子における「元惡」について

渋谷 由紀\*

## How did *Xunzi* consider Villains (元惡)?

SHIBUYA Yuki\*

### Abstract

*Xunzi* (荀子) claimed that moral education is effective to all human beings, but not to villains (元惡) who lack inborn ability to recognize the right Way. From here he drew a surprising conclusion that there is no hope of villains' moral improvement and we should not hesitate to execute them. However, in fact, no villain cannot be executed before commitment of his crime, so we seem to be led to another conclusion that in *Xunzi's* moral philosophy, even under the rule of sages, human society inevitably leaves rooms for villains and remains ethically imperfect.

キーワード：荀子，元惡，応報刑論，教化，人間社会

Keywords : *Xunzi*, villains, retributism, moral education, human society

### 1、はじめに

『荀子』王制篇には

請問爲政。曰、賢能不待次而舉、罷不能不待頃而廢、元惡不待教而誅、中庸雜民不待政而化。……（中略）……。故姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃反側之民、職而教之、須而待之、勉之以慶賞、懲之以刑罰。安職則畜、不安職則棄。五疾、上收而養之、材而事之、官施而衣食之、兼覆無遺。才行反時者死無赦。夫是之謂天德、王者之政也。（政を為すことを請い問う。曰く、賢能は次を待たずして挙げ、罷・不能は頃を待たずして廃し、元惡は教を待たずして誅し、中庸雜民は政を待たずして化す。……（中略）……。故に姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃、反側の民は、職として之に教え、須にして之を待ち、之を勉むるに慶賞を以て

し、之を懲しむるに刑罰を以てす。職に安んずれば則ち畜い、職に安んぜざれば則ち棄つ。五疾は、上收めて之を養い、材して之を事い、官施して之に衣食し、兼ね覆いて遺すこと無し。才行の時に反する者は死して赦すこと無し。夫れ是れを之れ天徳と謂う。王者の政なり）

とあり、「元惡」は教化を施すまでもなく誅殺するのが理想的な政治とされている。筆者はかつて拙論『荀子』に見られる人間の倫理的等級について<sup>i)</sup>で、この王制篇の「元惡」及びその言い換えと考えられる「才行反時者」について、「天下之嵬、一時之瑣也」（正論篇）、「詭怪狡猾之人」（非十二子篇）とされる存在と並べて、彼らは最高の指導者によっても教化が不可能であり、人間に必要な倫理的な能力が欠損した最下等の、いわば人間以下の〈人間〉見なせる存在であることを指摘した。

\* 工学部人間科学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

しかし、「元惡」は王制篇では直ちに誅殺すべきとされるが、正論篇で「天下之嵬、一時之瑣也」と断じられる、古代の聖王・帝堯の子である朱と、帝堯を継いだ聖王・帝舜の異母弟である象は、主だった伝承では誅殺や刑死などの結末は迎えていない。本論では荀子が言う「元惡」とは何者であるのかの検討を試みたい。

## 2、王制篇「元惡」の解釈

はじめに、先に挙げた王制篇に見られる「元惡」の内容を確認しておこう。王制篇では「元惡」に続いて「中庸雜民」についての言及があるが、ごく平凡で平均的な民衆とされる彼らは、理想的な聖王が統治する制度下では「政（政治）」に因らないでも教化される、と述べられる。また「姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃反側之民」については「中庸雜民」と比較するとより劣等で、言動が邪で怠惰であるような民衆とされている。彼らは、一定の時間をかけて職業についての教育を施した上で、望ましい行動は報奨によって励まし、望ましくない行動については刑によって懲罰し、彼らが安定して自分の職に従事するようになれば養い、そうならなければ遺棄すべき、と述べられる。これを「政」に因らないでも教化される「中庸雜民」と比べた場合、「政」とは、職業教育や褒賞と刑罰による具体的な統制を意味していると考えられ、「中庸雜民」にはそこまでの必要はないのに対し、「姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃反側之民」は「政」による強制力を伴ったより直接的な指導が必要とされていたことが分るだろう。

「姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃反側之民」は、理想的な君主に教導され、その結果安定して職に従事するようになれば認められ、そうならなければ排除される。これはつまり、平凡で平均的な民衆よりも劣等な民衆であっても、理想的な君主による強制力を伴う指導を受ければ、教化され得ることを示しているといえる。

その一方で「元惡」は「不待教而誅」とされているが、「姦言、姦説、姦事、姦能、遁逃反側之民」の下位に挙げられる「才行反時者」についても「死無赦」と述べられる。これは、「姦言、姦説、姦事、

姦能、遁逃反側之民」にさえ強制力を伴う指導を受ければ変化・向上する可能性は認められているのに、「元惡」及び「才行反時者」は、それが聖王によるものであっても一切の教導は無効・無用であり、それ故に誅殺という形で直ちに社会から排除されるべきと見なされていることを示すだろう。これを踏まえると、「元惡」の特徴は、単に行為として、実際に悪事を犯してしまった悪人ということではなく、理想的な君主によってさえ教化され得ない、経験によって変化・向上していく可能性を最初から欠いている点にあると考えられる。

## 3、夏の桀王・殷の紂王

朱と象は正論篇で「天下之嵬、一時之瑣也」と断じられるのだが、『荀子』全体では、伝説の夏王朝最後の君主・桀王と殷王朝最後の君主・紂王が悪逆非道な人間の代表格として言及されることが多い。

例えば正論篇には、

桀紂非去天下也。反禹湯之徳、亂禮義之分、禽獸之行。積其凶、全其惡、而天下去之也。

（桀・紂は天下を去るに非ざるなり。禹湯の徳に反し、礼義の分を乱し、禽獸の行いあり。

其の凶を積み、其の惡を全うし、而して天下之を去るなり）

とあり、桀紂は祖先である夏の禹王・殷の湯王の徳に反し、礼の秩序を乱し、動物並みの行いをし、凶事・悪事を繰り返して完遂した、とされる。

更に、同じく正論篇には

於是焉桀紂羣居、而盜賊擊奪、以危上矣。必禽獸行、虎狼貪。故脯巨人、而炙嬰兒矣。（是に於いて桀紂群居し、盜賊擊奪し、以て上を危うくし、禽獸の行、虎狼の貪を必するなり。

故に巨人を脯にし嬰兒を炙にす）

ともある。ここでの「桀紂」が「羣居」という表現は、個人としての桀王・紂王に止まらず、強盜・略奪・謀反を働き、人間の大人は干し肉にし、嬰兒は炙り肉にして食人に勤しむような極悪人の代名詞として「桀紂」の語が用いられていることを示すと言えるだろう。

では、このような桀紂は果たして「元惡」と見

なしてよいのだろうか。そこで注目すべきなのは以下の榮辱篇の記述である。

凡人有所一同。飢而欲食、寒而欲煖、勞而欲息、好利而惡害、是人之所生而有也、是無待而然者也、是禹桀之所同也。目辨白黑美惡、耳辨聲音清濁、口辨酸鹹甘苦、鼻辨芬芳腥臊、骨體膚理辨寒暑疾養、是又人之所常生而有也、是無待而然者也、是禹桀之所同也。可以爲堯禹、可以爲桀跖、可以爲工匠、可以爲農賈、在執注錯習俗之所積耳。是又人之所生而有也、是無待而然者也、是禹桀之所同也<sup>ii</sup>。爲堯禹則常安榮、爲桀跖則常危辱。爲堯禹則常愉佚、爲工匠農賈則常煩勞。然而人力爲此、而寡爲彼、何也。曰、陋也。堯禹者、非生而具者也、夫起於變故、成乎脩脩之爲、待盡而後備者也。人之生固小人、無師無法則唯利之見爾。(凡そ人には一同なる所有り。飢えては食を欲し、寒えては煖を欲し、勞しては息を欲し、利を好み害を惡む、是れ人の生れながらにして有する所なり、是れ待つを無くして然る者なり、是れ禹桀の同じき所なり。目は白黒美惡を弁じ、耳は聲音清濁を弁じ、口は酸鹹甘苦を弁じ、鼻は芬芳腥臊を弁じ、骨體膚理は寒暑疾養を弁ず、是れ又た人の常に生まれながらにして有する所なり、是れ待つを無くして然る者なり、是れ禹桀の同じき所なり。以て堯禹爲るべく、以て桀跖爲るべく、以て工匠爲るべく、以て農賈爲るべし。勢に注錯習俗の積む所に在るのみ。是れ又た人の生れながらにして有する所なり、是れ待つを無くして然る者なり、是れ禹桀の同じき所なり。堯禹と爲れば則ち常に安榮、桀跖と爲れば則ち常に危辱なり。堯禹と爲れば則ち常に愉佚、工匠農賈と爲れば則ち常に煩勞なり。然り而して人の力めて此を爲して彼を爲すこと寡きは何ぞや。曰く、陋なればなり。堯禹なる者は、生れながらにして具る者にあらざるなり。夫れ故を變ずるに起こり、修脩の爲を成し、尽くすを待ちて後ち備る者なり。人の生は固より小人なり、師無く法無くんば則ち唯だ利を之れ見るのみ)

ここでは桀王が夏王朝の開祖・禹王と並べて「禹

桀」と記され、また伝説の強盗団の首魁であった盗跖と並べて「桀跖」と記されている。そして、感情や欲望においても、知覚・感覚器官の働きにおいても、また経験による可変性があるという面においても、桀と禹は人間として生得的には同一の機能を持つとされているのである。その上で、伝説の聖王である堯や禹と、桀や盗跖との隔たりの原因は桀や盗跖が「陋」であったことによる、とされる。「陋」なる状態に陥る原因は、後文の記述を踏まえると、適切な「師」と適切な「法（指導法）」を得られなかったことによると考えられる。つまり、結果的に「桀」や「盗跖」になってしまった人間であっても、適切な経験を積み重ねる機会があれば堯や禹になり得る可変性を有していたことになり、彼らのことを経験によって変化・向上していく能力が欠損している「元惡」と同種の人間であるとは見なせないのである。

また勸学篇には

百發失一、不足謂善射。千里蹞步不至、不足謂善御。倫類不通、仁義不一、不足謂善學。學也者、固學一之也。一出焉、一入焉、塗巷之人也。其善者少、不善者多、桀紂盜跖也。全之盡之、然後學者也。(百發も一を失わば、善射と謂うに足らず。千里して蹞歩至らざれば、善御と謂うに足らず。倫類に通ぜず、仁義に一ならざれば、善學と謂うに足らず。学なる者は、固より之を一にするを学ぶなり。一は出で一は入るは塗巷の人なり。其の善者少く不善者の多きは桀紂盜跖なり。之を全くし之を尽くして、然る後に學者なり)

ともあり、一般的な人間(「塗巷之人」と「桀紂盜跖」を分けるのは学んだ「善」「不善」の多少という量的な程度の問題であり、人間としての本質に違いがあるとは考えられていない。

更に解蔽篇には

昔人君之蔽者、夏桀殷紂是也。桀蔽於末喜斯觀、而不知關龍逢、以惑其心、而亂其行。桀蔽於妲己、飛廉、而不知微子啟、以惑其心、而亂其行。故羣臣去忠而事私、百姓怨非而不用、賢良退處而隱逃。此其所以喪九牧之地、而虛宗廟之國也。桀死於鬲<sup>iii</sup>山、紂縣於赤旆。身不先知、人又莫之諫、此蔽塞之禍也。成湯

監於夏桀、故主其心而慎治之。是以能長用伊尹、而身不失道、此其所以代夏王而受九有也。文王監於殷紂、故主其心而慎治之。是以能長用呂望、而身不失道、此其所以代殷王而受九牧也。(昔人君の蔽れし者は、夏桀殷紂是れなり。桀は末喜・斯觀に蔽われて閔竜逢を知らず、以って其の心を惑わして其の行を乱る。桀は妲己・飛廉に蔽われて微子啓を知らず、以って其の心を惑わして其の行を乱る。故に群臣忠を去りて私を事とし、百姓怨非して用られず、賢良処を退きて隠逃す。此れ其の九牧の地を喪い、宗廟の国を虚しくする所以なり。桀は鬲山に死し、紂は赤旆に隕かる。身らは先に知らず、人も又た之を諫むること莫し。此れ蔽塞の禍なり。成湯は夏桀に監み、故に其の心を主りて之を慎み治む。是を以って能く長く伊尹を用いて身らは道を失わず。此れ其の夏王に代わりて九有を受くる所以なり。文王は殷紂に監み、故に其の心を主りて之を慎し治む。是を以って能く長く呂望を用いて身らは道を失わず。此れ其の殷王に代わりて九牧を受くる所以なり)

とあり、桀王は末喜と斯觀によって、紂王は妲己と飛廉によってその「心」が惑わされ、行動も乱れてしまったために、適切な臣下の忠誠を得られずに身を滅ぼし天下を失ったと記されている。反対に湯王や文王は自らの「心」を統御して安定させ、適切な人物を見出して自分を補佐させることが出来たので、正しい「道」を失うことが無く、天下を授かることが出来た、とされる。ここで桀や紂が悪逆非道な行為を犯し、それによって身を滅ぼした原因は、その生得的な能力にあるのではなく、彼らの経験と自分の「心」の統御の不十分さにあるとされているのである。

以上、極悪人の代名詞である桀・紂・盗跖についての記述を検討したが、彼らは結果としての為人や行為は凶悪非道であり、それによって身を滅ぼした<sup>iv)</sup>が、王制篇の「元惡」のように、理想的な君主による指導を受けても変化・向上する可能性を生得的に欠いていたわけではないことが了解される。

#### 4、「天下之嵬、一時之瑣也」と「妖怪狡猾之人」

第二章では悪逆非道な人間の代表とされる桀王と紂王、盗跖に対する『荀子』の記述を確認したが、他方で正論篇に「天下之嵬、一時之瑣也」と評される朱・象はどうだろうか<sup>v)</sup>。ここで留意すべきなのは、『史記』卷一・五帝本紀には、

舜之踐帝位、……(中略)……封弟象爲諸侯。……(中略)……。堯子丹朱、舜子商均、皆有疆土、以奉先祀。(舜の帝位を踐むや、……(中略)……。弟象を封じて諸侯と爲す。……(中略)……。堯の子丹朱、舜の子商均、皆強土有りて以て先祀を奉ず)

とあり、『孟子』万章上篇に

萬章問曰、象日以殺舜爲事、立爲天子、則放之、何也。孟子曰、封之也。或曰放焉。(萬章問いて曰く、象は日に舜を殺すを以て事と爲すも、立ちて天子と爲れば則ち之を放つは、何ぞや、と。孟子曰く、之を封ずるなり、或ひとは放つと曰う)

とあるように、朱・象は誅殺されるどころか最終的には封建されたと伝わっていることである。

朱について、『尚書』益稷には

無若丹朱傲、惟慢遊是好、傲虐是作、罔晝夜頌頌。罔水行舟、朋淫于家、用殄厥世。(丹朱傲にして惟れ慢遊を是れ好み、傲虐を是れ作し、昼夜と罔く頌頌とし、水罔きに船を行き、家に朋淫し、用って厥の世を殄つが若くする無かれ)

とその暴虐と放蕩が伝えられ、『史記』卷一・五帝本紀では、堯は嫡子の丹朱が不肖であることを分かっていたので、丹朱ではなく舜に天子の位を禅譲した。しかし堯の死後に舜は自らではなく丹朱に天下を譲ろうとしたが、諸侯や民衆が舜の方を選んだことで、最終的には舜が天子となった、とされる<sup>vi)</sup>。舜の異母弟である象については『史記』五帝本紀、『尚書』堯典、『孟子』万章上篇にその伝承が見られるが、素行も素質も劣悪で、父の瞽瞍と共謀して度々舜を殺す計略を企てては失敗している。しかしながら、その後も舜は変わらず父に従い弟を愛する態度を貫いた、と伝わっている



vii。

この二人について『荀子』では正論篇に、  
世俗之爲説者曰、堯舜不能教化。是何也。曰、  
朱象不化。是不然也。堯舜至天下之善教化者  
也。南面而聽天下、生民之屬莫不振動從服以  
化順之。然而朱象獨不化、是非堯舜之過、朱  
象之罪也。堯舜者、天下之英也。朱象者、天  
下之嵬、一時之瑣也。今世俗之爲説者、不怪  
朱象、而非堯舜、豈不過甚矣哉夫是之謂嵬説。  
……（中略）……。堯舜者、天下之善教化者  
也、不能使嵬瑣化。何世而無嵬。何時而無瑣。  
自太皞燧人莫不有也。（世俗の爲説者曰く、  
堯舜は教化すること能わざるなり、と。是れ  
何ぞや。曰く、朱象化せざればなり、と。是  
れ然らざるなり。堯舜は天下の善く教化せる  
者の至なり。南面して天下を聴けば、生民の  
属は振動従服して以て之に化順せざるは莫し。  
然り而して朱象のみ独り化せざりしは、是れ  
堯舜の過に非ずして、朱象の罪なり。堯舜な  
る者は、天下の英なり。朱象なる者は、天下  
の嵬、一時の瑣なり。今世俗の爲説者、朱象  
を怪まずして、堯舜を非る、豈に過つこと甚  
だしからずや。夫れ是れを之れ嵬説と謂う。  
……（中略）……。堯舜なる者は、天下の善  
く教化する者なるも、嵬瑣をして化せしむる  
能わず。何れの世にしてか嵬無からん。何れ  
の時にしてか瑣無からん。太皞燧人より有ら  
ざること莫きなり）

とする議論がある。聖王である堯と舜には人々を  
教導する最高の能力が備わっていて全ての人民を  
教化することが出来たが、それにも関わらず朱と  
象だけは教化することが出来なかった。その原因  
を堯・舜の人々を教導する能力の不足ではなく、  
朱と象に教導を受けて変化・向上する能力が欠損  
していたことに求め、朱・象は「天下之嵬、一時  
之瑣也」であると断じる。「嵬」とは奇怪、「瑣」  
とは瑣末・無価値という意味になるので、「天下  
之嵬、一時之瑣也」は、天下の中で最も奇怪で、  
同時代の中で最もつまらない、いわば人間の屑と  
でもいうような意味になるだろう。

このような朱・象は前章で「陋」とされた桀・  
紂とは異なり、最高の教化力を備えていた聖王が

身近にいて、その最良の「師」から「法」を授か  
る機会に恵まれていたにも関わらず、自身が倫理  
的に変化・向上することが無かった。同時代の全  
ての人民は堯・舜の指導で教化されたにも関わら  
ず、彼らだけが変化・向上しなかった。「天下之  
嵬、一時之瑣也」とされる朱・象の有様は、教化  
を待たずに誅殺すべきとされる王制篇の「元惡」  
の特徴と一致する。しかし、先に述べた通り、こ  
の両名が堯・舜によって処刑されたなどとは、一  
般的な伝承としては伝わっていない<sup>viii</sup>。

また、非十二子篇には

遇君則脩臣下之義、遇郷則脩長幼之義、遇長  
則脩子弟之義、遇友則脩禮節辭讓之義、遇賤  
而少者、則脩告導寛容之義。無不愛也、無不  
敬也、無與人爭也、恢然如天地之苞萬物。如  
是、則賢者貴之、不肖者親之。如是、而不服  
者、則可謂詖怪狡猾之人矣、雖則子弟之中、  
刑及之而宜。（君に遇えば則ち臣下の義を修  
め、郷に遇えば則ち長幼の義を修め、長に遇  
えば則ち子弟の義を修め、友に遇えば則ち礼  
節辭讓の義を修め、賤にして少なる者に遇え  
ば、則ち告導寛容の義を修む。愛せざる無く、  
敬せざる無く、人と争うこと無く、恢然とし  
て天地の万物を苞むが如し。是の如くなれば、  
則ち賢者は之を貴び、不肖者は之に親しむ。  
是の如くにして、而も服せざる者は、則ち詖  
怪狡猾の人と謂うべし、則ち子弟の中と雖も、  
刑之に及びて宜し）

とあり、朱・象のような歴史的に伝承が伝わる人  
物ではないが、非常に品行に優れた人が身近にい  
るにもかかわらず、その人に心服し感化されない  
ような人間を「詖怪狡猾之人」と評し、そのよう  
な人物は同門の子弟であったとしても処刑に陥っ  
ても構わない、とされている。この「詖怪狡猾之  
人」も、理想的な人物の指導を受ける機会があつ  
ても自身は変化・向上しない人物であり、その点  
で「元惡」や「天下之嵬、一時之瑣也」と同じで  
ある。そして『荀子』中で「怪」とは「恒（恒常  
的）」に対する例外や異常現象を指す表現であり<sup>ix</sup>、  
「詖怪狡猾之人」にも「天下之嵬、一時之瑣也」  
同様、非常に奇怪で例外的な存在であるとする意  
味が含まれている。だが、この「詖怪狡猾之人」

も、処刑されても構わない、とは述べられても「元惡」と場合のように直ちに処刑すべきだ、とは主張されていない。

## 5、「殺人者死、傷人者刑」

では、以上のようにその特徴としては「元惡」と同じく教育によって倫理的に変化・向上する能力を欠く「天下之嵬、一時之瑣也」や「詭怪狡猾之人」が直ちに誅殺される訳ではないのは何故であろうか。それには、『荀子』中の応報刑論が大きく関わっていると考えられる。

正論篇には、

罪至重而刑至輕、庸人不知惡矣、亂莫大焉。  
凡刑人之本、禁暴惡惡、且徵其未也。殺人者不死、而傷人者不刑、是謂惠暴而寬賊也、非惡惡也。……（中略）……凡爵列、官職、賞慶、刑罰、皆報也、以類相從者也。一物失稱、亂之端也。夫德不稱位、能不稱官、賞不當功、罰不當罪、不祥莫大焉。昔者武王伐有商、誅紂、斷其首、縣之赤旆。夫征暴誅悍、治之盛也。殺人者死、傷人者刑、是百王之所同也、未有知其所由來者也。（罪至重にして刑至輕なれば、庸人は惡むことを知らず、乱之より大なるは莫し。凡そ人を刑するの本は、暴を禁じ惡を惡み、且つ其の未を徵すなり。殺人者も死せず、傷人者も刑せられざれば、是れ暴に恵みて賊に寛なりと謂う。惡を惡むに非ざるなり。……（中略）……凡そ爵列、官職、賞慶、刑罰は皆な報なり。類を以て相い従う者なり。一物も稱を失うは乱の端なり。夫れ徳は位に稱わず、能は官に稱わず、賞は功に当たらず、罰は罪に当たらざるは、不祥これより大なるはなし。……（中略）……。昔者、武王有商を伐ち、紂を誅し、其の首を斷ち、之れを赤旆に懸く。夫れ暴を征し悍を誅すは治の盛なり。殺人者は死し、傷人者は刑せらるるは、是れ百王の同じくする所なり、未だ其の由りて来る所を知る者有らざるなり）

とあり、人を殺す者は死刑、人を傷害する者は相応の肉刑（身体刑）に処することは、伝統的・普遍的な大原則であると主張されている。「爵列、官

職、賞慶、刑罰、皆報也。以類相從者也」ともされ、賞罰は行為に対する報いであり、必ずその行為の「類」に従った内容でなければならない、と述べられる。

この原則によるならば、朱・象であれ「詭怪狡猾之人」であれ、実際に殺人や傷害を実行しない限りは処刑することは不可能となる。前述の通り、丹朱には淫蕩や暴虐の伝承はあるが、父殺しを計ったとは伝えられず、結果的に舜の即位を妨げることも出来ていない。象は度々舜を謀殺しようとしているが、いずれも未遂に終わったとされている。

これを踏まえて再び王制篇の「元惡」を見てみると、その言い換えの「才行反時」では、素質・才能としての「才」だけではなく、実際の行動である「行」の両方ともが「時」に反する存在について、誅殺して容赦すべきではないとされている点に気づかされる。教えを待たずして誅殺すべき「元惡」も、教導によって変化・向上する能力が欠損しているのみならず、実際に人を殺傷する行為を実行していることが、直ちに処刑されるべき根拠となっているのではないだろうか。

筆者はかつて、「元惡」のような教化される能力が欠損している人間以下の〈人間〉の特徴として、正しい「道」を知るために必要な「心」の「知」、「虚」「壹」「静」の能力が動物以下に低く、肉親の死でさえ「忘」れてしまう、とされている点を指摘した<sup>x</sup>。

関連して、榮辱篇には

鬪者、忘其身者也、忘其親者也、忘其君者也。行其少頃之怒、而喪終身之軀、然且爲之、是忘其身也。家室立殘、親戚不免乎刑戮、然且爲之、是忘其親也。君上之所惡也、刑法之所大禁也、然且爲之、是忘其君也。憂忘其身、内忘其親、上忘其君、是刑法之所不舍也、聖王之所不畜也。乳彘觸虎、乳狗不遠遊、不忘其親也。人也、憂忘其身、内忘其親、上忘其君、則是人也、而曾猶彘之不若也。……（中略）……人之有鬪、何哉。我欲屬之狂惑疾病邪、則不可。聖王又誅之。我欲屬之鳥鼠禽獸邪、則又不可。其形體又人、而好惡多同。人之有鬪、何哉。我甚醜之。（鬪う者は、其の身

を忘るる者なり。其の親を忘るる者なり、其の君を忘るる者なり。其の少頃の怒を行いて、終身の軀を喪う、然も且つ之を為すは、是れ其の身を忘るるなり。家室は立どころに残なわれ、親戚も刑戮より免れず、然も且つ之を為すは、是れ其の親を忘るるなり。君上の悪む所、刑法の大禁する所なり、然も且つ之を為すは、是れ其の君を忘るるなり。憂ては其の身を忘れ、内は其の親を忘れ、上は其の君を忘るるは、是れ刑法の舍かざる所なり、聖王の畜わざる所なり。乳彘も虎に触れず、乳狗も遠く遊ばざるは、其の親を忘れざるなり。人にして憂ては其の身を忘れ、内は其の親を忘れ、上は其の君を忘るるは、則ち是れ人なるも曾ち狗彘にも之れ若かざるなり。……(中略) ……人の闘有るは何ぞや。我之を狂惑疾病に属さんと欲するや、則ち不可なり。聖王も又た之を誅すればなり。我之を鳥鼠禽獸に属さんと欲するや、則ち又た不可なり、其の形体も又た人にして、好悪も多く同じければなり。人の闘有るは何ぞや。我甚だ之を醜む)

とあり、ここでもやはり私的な暴力行為は、一時の怒りにより自分の一身や家族の安全、また君主の刑法をも「忘」れてしまうために犯される、と述べられている。更に、そのような人物は「狗彘」にも及ばない、とされるが、姿かたちや好悪の感情の在り方は人間一般と同じなので「鳥鼠禽獸」と見なすことは出来ず、また聖王が責任能力を認めて処罰しているので重度の精神障害(「狂惑疾病」)があるとも考えることも出来ない、とし、人間が暴力行為に及んでしまうことを甚だしく醜悪だ、と嘆いている。

この例からは、「心」の「知」に欠陥がある者は、一時的な激情によってより重要なものがあることを直ぐに忘れ、容易に暴力行為に及ぶとされていたことが了解できる。従って、「天下之鬼、一時之瑣也」や「詭怪狡猾之人」が、実際に人を殺傷する行為に及ぶ可能性は極めて高いと言えるだろう。しかしそうであっても、他者を殺傷する行為が未遂であるのにその人物を処刑するというのでは、応報刑論の原則に反してしまう。更に特に象の場合、異母兄の舜が象を容赦し封建までしている根

拠は家族に対する愛情であるとされており<sup>xi</sup>、一切の教化の可能性を欠く劣等な人物であっても、近しい親族であるといった固有の条件によっては寧ろ意図的に誅殺を免れさせている。

これはつまり、堯や舜のような最上の君主が統治している社会においてさえ、非常に例外的で特異な存在ではあるが、どのような「師法」も無効であり生まれつき「小人」である本性が変化・向上する可能性がないが、実際に人を殺傷する行為に及ばなければ刑罰によって排除することができず、人間社会はそのような人間以下の〈人間〉との共存を甘受せざるを得ないことを示すものである。更に朱・象を「天下之鬼、一時之瑣也」とする正論篇では「何世而無鬼。何時而無瑣」とも述べられ、どのような世代・時代であっても「鬼」や「瑣」は必ず出現してしまうものだ、ともされている。最上の君主が統治する最も理想的な状態の人間社会でさえ、「天下之鬼、一時之瑣也」や「詭怪狡猾之人」の出現を防止することは出来ず、一度出現した彼らを教化して暴虐を予防することもできない。彼らが実際に暴力行為を犯して初めて「元惡」の条件が満たされるので、そこで事後的に処刑して排除する以外の対策が無い。これは要するに、荀子が考える人間社会では、最上の聖王の統治下においてさえ、その統治が完全に完成された理想形は実現し得ないことを意味すると言えるだろう。

## 6、まとめ

荀子は、人間の生得的な「性」は「惡」ではあるが、人間には正しい「道」を知るための「心」の「知」もまた生得的に備わっており、また人間は、経験によって「性」の用い方を教化し最終的には「君子」や「聖人」となり得る可能性も備えていると考える<sup>xii</sup>。性惡説を説く荀子ではあるが、実際は、人間を自身の生得的な機能によって善を達成し得る存在と見なしているのである。それにも関わらず人間が桀・紂・盗跖のような暴虐な人物になってしまうのは、適切な「師」「法」の教導を受ける機会が無く、生得的な「小人」の状態を向上・変化させられなかった場合である。従って、



最上の君主が然るべき権力を得て、統治する人民を教導する機会が与えられるなら、全ての人間がその教化に服することとなり、理論的には人類は理想的で安定的な社会を完成させられることになるはずだ。

だが、このような荀子の理論の中で、最上の聖王によっても生得的な「小人」の状態を教化し改善させることが不可能で、暴力行為の後に事後的に排除することしかできない「元惡」の存在は、いかなる意味を持つだろうか。どのような世代・時代であっても教化不可能な「嵬」や「瑣」は出現してしまうのだから、ある時点では立派な君主が統治する理想的な社会を完成し得たと見なせたとしても、次の瞬間にはどこかで「嵬」や「瑣」が発生しているかも知れない。一度出現した「嵬」や「瑣」は高い確率で他の人間を殺傷する暴力行

為に及んで「元惡」として顕在化するが、その残虐行為が未遂の間は彼らを社会から排除することも不可能だ。理想的な聖王の統治する社会においてさえ、人間は自らの力の及ばないところでいつか必ず発生し、いずれは他者を殺傷し社会を混乱へと導く「元惡」となる存在に対して、不断の警戒を続けていなければならないことになる。これが荀子の想定する人間社会だが、これを踏まえてなお、人間には、人間社会の理想を完成させることが可能だと、果たして言うことができるだろうか。

人間の生得的な能力の中に善を完成させる機能を見出す荀子の思想が、依然として性惡説と言い得る理由はここにあると思われるが、この点についての詳細な検討は今後の課題としたい。

- i 後漢経学研究會『後漢経学研究會論集』第3号(2011年6月)所収。
- ii 「是又人之所生而有也、是無待而然者也、是禹桀之所同也」について王念孫は重複文と見なして削除し、金谷治訳注『荀子・上』(岩波書店、1961年)もそれに従っているが、藤井専英訳注『荀子・上』(明治書院、1966年)の解釈を踏まえて削らない。
- iii 楊倞に従い「亭」を「鬲」の誤りとする。
- iv 『史記』卷六十一・伯夷列伝に、盜跖は「殺不辜、肝人之肉、暴戾恣睢」であつたが数千人の配下を従え天寿を全うしたとある。一方『莊子』駢拇篇「盜跖死利於東陵之上」、『韓非子』忠孝篇「毀廉求財、犯刑趨利、忘身之死者、盜跖是也」は盜跖の刑死を伝えている。
- v 朱・象の伝承については、袁珂著・鈴木博訳『中国の神話伝説(上)』(青土社、1993年)を参照。
- vi 『史記』卷一・五帝本紀「堯崩、三年之喪畢、舜讓辟丹朱於南河之南。諸侯朝覲者不之丹朱而之舜、獄訟者不之丹朱而之舜、謳歌者不謳歌丹朱而謳歌舜。舜曰、天也、夫而後之中國踐天子位焉、是爲帝舜」
- vii 『史記』卷一・五帝本紀は、瞽叟と象は米蔵に火を放つて舜を焼き殺そうとし、更に井戸を掘らせて埋め殺そうとしたが、その後も舜は瞽叟には従順に仕え、象に対してもますます愛情を注いだと伝えている。

- viii 『竹書紀年』には舜が堯を捉えて丹朱が堯に会うことを妨害したとする伝承(『史記』卷一・五帝本紀正義所引「竹書」、后稷が「帝朱」を丹水に放ったとする伝承(『山海經』海内南經・郭璞注所引「竹書」)が見られ、また『莊子』盜跖篇「堯殺長子、舜流母弟、疏戚有倫乎」、『韓非子』說疑篇「其在記曰、堯有丹朱、而舜有商均、啓有五觀、商有太甲、武王有管、蔡。五王之所誅者、皆父兄子弟之親也」のように、丹朱には堯によって誅殺されたとする異説もある。ただし『荀子』中には本論が挙げた箇所以外に朱・象の伝承は見られない。
- ix 拙論「『荀子』の天人觀について」(東京電機大学『東京電機大学総合文化研究』第14号、2016年12月)
- x 注i所掲論文及び「「性」を越えて：荀子の莊子批判」(東京電機大学『東京電機大学総合文化研究』第11号、2013年12月)
- xi 『孟子』万章上篇「仁人之於弟也、不藏怒焉、不宿怨焉、親愛之而已矣。親之、欲其貴也。愛之、欲其富也。封之有庫、富貴之也。身爲天子、弟爲匹夫、可謂親愛之乎」
- xii 拙論「荀子の修養論における知識と経験」(東京電機大学『東京電機大学総合文化研究』第15号、2017年12月)、「荀子修養論における「道」の真なる認識」(中央学院大学現代教養学部『中央学院大学現代教養論叢』創刊号、2019年3月)を参照されたい。